野における誰かが対象なのだろう。こういう歌も、あっていい。

豌豆の莢の内なる大家族ひとりぼっちの真珠を想う　小寺豊子

豌豆から真珠への連想がまことに意外で楽しい。前の大橋作品ともども、心の遊びとしての詩歌を思う。

電子音のキラキラ星が流れだしあきたこまちの炊ける夕暮　クリシュナ智子

あきたこまちが炊きあがっての夕飯である。キラキラ星の曲はフランス民謡。ここはアメリカ、食べるのは日本人とインド人。なんでもない日常的場面ながら、グローバルな内容の短歌であるわけだ。

傘たちがクラゲのやうに増えてくる蕨駅前広場恐ろし　松岡秀明

どこの駅前でも意味的にはいいはずだが、たぶん、読者は「蕨」という地名になんらかの心理的な影響をうけている。動き出そうとする拳のような蕨のかたち。

白玉はつるんと箸をすべり落ちぽちょんとはまる元の木阿弥　榊原碧

白玉はどこにはまったのだろう。考えたがついに分からない。分からないが、「ことわざ」のようにおぼえてしまいそうな口調のよさが楽しい。「……ぽちょんとはまる元の木阿弥」。

一日に日暮れはいちど合歓の葉の西施の如き瞼閉ぢけり　由田欣一

『奥の細道』の「象潟や雨に西施がねぶの花」を踏まえた一首。ただ、芭蕉の句は花だがこちらの主役は葉である。ここでの合歓の葉は睫毛のイメージなのか。

教へ子と言ふよりは娘とのたまひて恩恵ふかし不肖のわれに　島田節子

今では夢のような、古い時代の師弟関係のお手本をうたった歌という印象である。忙しいばかりの現在の学校教師、何かというとセクハラ、パワハラ、アカハラを云々される現代の教育現場では、とてもこういう師弟関係は期待できない。短歌のかたちもまた、古き時代の短歌のかたちを踏襲している。鏡のように現在の教育現場を映し出す作として選んでみた。

「アー鶴はめでたや」と唄う声聞こゆ鉄砲町の店の奥から　足立勝歳

古い町名「鉄砲町」が一首中で強くひびく。「アー鶴はめでたや」という歌の一節は、鉄砲町という地名といっしょに出ることによって、江戸時代以来の空気のようなものを醸し出している。一連中に桂小五郎が隠れたという崇鏡寺があるから、豊岡市の鉄砲町だろう。

大き紙におほひかぶさり動きけむ身体の去にて文字はのこりぬ　横山未来子

大きな文字を見て、書かれた現場、書いた人間の身体を想像している一首。紙にまたがって体をおおいかぶせるようにしてこの字を書いたのだろう、というわけである。「身体」をクローズアップしたところがポイント。